

アイスブレーキング(3)

毛利 邦彦*1

MOURI Kunihiko

前回までは化石でのアイスブレーキングを紹介しましたが、今回は産学官の連携促進を念頭に入れたアイスブレーキングを紹介します。

この話は私のオリジナルではありません。私が早稲田大学電気工学科の学生で、昭和43年(1968年)、「電気特論」の教官である高木先生が紹介した話です。今から35年も前の話ですが、これから書く話は鮮明に覚えており、時折前の会社(電源開発株)で、私の部下にも紹介していた関係で今でも忘れず皆様に紹介出来る訳です。

さて、下に示す回路図は「タンク回路」と言い、コイル、コンデンサーおよび抵抗で構成され、送信機(受信機)に用いられる電波を発信(受信)する最終段(初段)の回路です。ちなみにこの時の発信周波数(受信)は次の式で表されます。

$$f = 1/2\pi\sqrt{LC}$$

f : 発信周波数, L : インダクタンス,
 C : キャパシタンス

コイルは電流が電圧の位相に比べて90度遅れます。またコンデンサーは反対に電流が電圧の位相に比べて90度進む性質を持っています。抵抗は電流、電圧は同相で変化はありません。

この性質を人間に例えるとコイルは役所(官)の仕事に似て、「何か仕事を依頼しても、直ぐに仕事をしなく、遅れて仕事をする」。またコンデンサーは大学(学)に似て、「何か仕事を依頼する前から、先行して仕事(研究)をしている」。そして抵抗は企業活動(産)に似て「仕事必ず利益が出る仕事を選ぶように、世の中の動きに合わせた仕事をする」。

もちろん、役所には仕事を速くする役所もあり、大学に拠っては時代に乗り遅れた大学もあり、企業も先端技術を取り入れている企業もあり、決め付けた言い方には不快に思う方もいると思いますが、たとえ話ですので大目に見て下さい。

そして、皆さんの中には、役所仕事は時代を反映していないとか、官僚的で仕事の進行が遅いとよくクレームを聞きます。また大学には理想ばかり、または先端のことに走り現実を見ていないので、役に立たない研究ばかり志向していると、そして企業には企業は費用対効果と現実ばかり見ており、新しい展開に目を向けないと、それぞれが自分の視点で批判している現状があります。

このような気持ちが社会の中にあると何かと一生懸命仕事をする意欲が削がれてしまいます。そこで「タンク回路」の話になります。「タンク回路」は三つの性質の組み合わせで初めて仕事をエネルギーにして取り出せる回路です。この回路ではどの一つが足りなくとも機能し

ません。その自然現象のアナロジーを考えると次のようなアナロジーとなります。

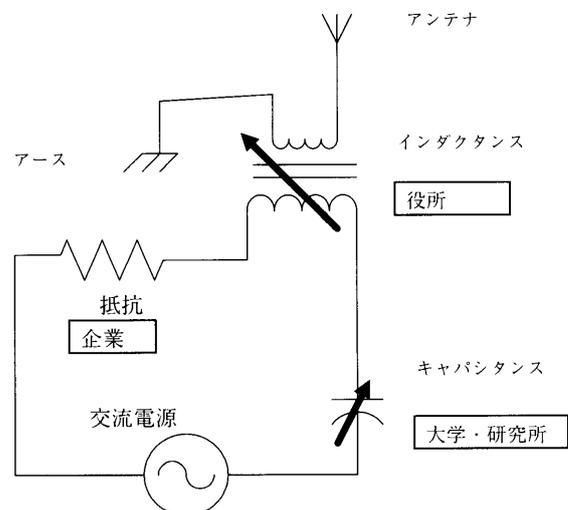
「刺激(仕事)に対して遅れた動作」、「仕事(刺激)に対して進みすぎる動作」「仕事(刺激)に対して同じ動作」を組み合わせたら「エネルギー」を取り出せる自然界の現象があるのですから、産学官の連携を上手く取り組めば必ず「エネルギー」が取り出させる筈です。人間は自らの意思で行動していても何処か自然の法則に従った行動となると考えられます。

それでは何故上手に行かない場合があるのでしょうか。それは目的の周波数(目的)に同調させる為には発信(受信)周波数を選択するバリコン(バリアブルコンデンサー)またはスライドコイルがあり、キャパシタンスまたはインダクタンスを変化させています。

発信したい周波数(目的)を選択(達成)させる為には調整機能があり、この機能で初めて目的とした周波数が選択でき発信が出来るわけです。

このバリコンの機能(調整機能)は社会(組織)において「マネジメント」と思います。異なった性質を上手く取り入れ仕事エネルギーを引き出すことが力(エネルギー)になります。人間社会は色々な個性の集団ですから、「遅れる人」「早い人」「マイペース」の人により組織が構成されています。この組織を生かすも殺すも「マネジメント」次第ではないでしょうか? 役所、大学、企業を批評する人は、多分「マネジメント」が不慣れではないでしょうか。ご自身も間違いなく批評されていると思います。

この話をプレゼンの前に「タンク回路」の話をして、最後に「産学官連携」の話で結び、産学官連携の必要性を強調いたします。またこの話は組織論の中での「マネジメント」に通じる話です。身の回りで実感を持っている人が多くいると思います。



タンク回路の概念図

原稿受付 2003年8月18日

*1 榎八戸インテリジェント プラザ

〒039-2245 青森県八戸市北インター工業団地1-4-43